

## 不可解な反対論

では、どうして黒田氏の研究が、幼児の漢字教育反対論の根拠になってしまったのか。私は次のように考える。黒田氏の発表の中には、確かに「追跡調査の最終段階である三年生に対して行った“漢字テスト”では、幼稚園で漢字教育を受けた子のグループと、受けなかった子のグループとの差は、わずかしがなく、有意の差は見られない」とある。

しかし、それは「図形(知能)テストでは、初め差がなかったのに、漢字教育を実施した後の調査では、有意の差が生じている」ということから、「漢字教育により、漢字をいくつ覚えた、覚えないうよりも、知能が向上したという事実の方が重大ではないか」という問題を提起するためのアクセントにしたのではないか。

黒田氏の研究発表の意図は、疑う余地もなく、「幼児期における漢字教育の効果は、漢字そのものよりも知能の向上をもたらす点にある」ことを主張することにあつた。私はそれを確信する。そのことは、氏の発表の標題に「認知能力(知能)の発達の観点から」という副題をつけており、かつ“知能の観点”から観て、漢字教育を受けた子供たちの方が、明瞭に向上している事実を発表していることで解る。

そこで、知能の向上に有効なことを強調するため、ことさらに漢字テストには有意の差が出ないよう、工夫をしたのではあるまいか。そう考えるとつじつまが合う。

では、黒田氏の漢字テストには、どんな工夫がなされ、有意の差が出なかったのだろうか。それには、従来の漢字教育と、私の漢字教育との違いから、説明を始めなければならない。

私は、「“鳩”は“鳥”よりも覚えやすく、“鳥”は“九”よりも覚えやすい」という新しい漢字教育観をもっている。今の学校教育では、“九”は一年生で、“鳥”は二年生で学習するが、“鳩”は高校でなければ学習しない。しかし、私の漢字教育では、“九”よりも“鳥”よりも先に“鳩”を教える。

なぜなら、それが学習の自然の在り方だからであり、学習を容易にするからである。第一、“鳥”という名の鳥は世の中に存在しない。また、“鳥”という概念は、鳩や鶏や鶴などの体験を通して、初めて理解できる概念である。だから、“鳩”や“鶏”や“鶴”という言葉は、“鳥”よりも先に教えられるべき言葉なのである。このことは、漢字の場合でも全く同様である。

もしも疑問に思われたら、試みに、“鳩”と“九”という漢字を、幼児に同じ条件で数秒間見せ、教えてみられるがよい。翌日テストしてみても、幼児に読めるのは“鳩”であって、“九”は読めないことが解るはずである。“九”を覚えるのに必要な時間で“鳩”や“蜂”や“猫”などの漢字が、少なくとも十字は覚えられることが解るであろう。

だから、幼稚園で学習する漢字は、小学校や中学校では学習しないものが多い。それで、黒田氏の漢字テストではこういう漢字がすべて除外され、幼稚園で漢字を学習した子供も、学習しなかった子供も、全く同じ条件に置いたのである。

つまり、このテストに出題された漢字は、両者が小学校の三年間に学習した漢字の中から選ばれた。だから、両者が同じ成績になっても、少しも不思議はない。しかし、事實は、有意の差こそ出なかったが、差は出たのである。だから、これほどまでにして土俵を同じにすることに努力しても、なお差が出た、ということこそ重視されるべきであろう。